

## 第2回秋田県文化芸術推進協議会 議事要旨

日 時：令和4年8月25日（木）13：30～15：35

開催場所：アトリオン 地下1階 多目的ホール

出席者：（委員）伊藤雅和、齊藤壽胤、三富章恵、片山泰輔、藤田ゆうみん、  
加賀谷葵、池田孝幸、相原学、花柳登代丈（野口裕子代理）

※敬称略

（事務局）（文化振興課）安田課長、成田班長、安田副主幹

（観光戦略課）安達班長

（観光振興課）石山班長

（生涯学習課）奈良学芸主事

（文化財保護室）伊藤主任学芸主事

議 題：（1）第3期あきた文化振興ビジョン骨子案について  
（2）その他

### 【発言内容等】

1 文化振興課 課長 挨拶

2 委員紹介

3 会長及び副会長の選出

委員の互選により、野口裕子委員が会長に、片山泰輔委員が副会長に選出された。

4 片山副会長挨拶

所属は静岡文化芸術大学という浜松市にある県立の大学であるが、自宅は東京にあり、新幹線で通っている。通勤に掛かる時間は80分くらい。秋田まで新幹線で来ると4時間ということで、通勤となると厳しいが、浜松ぐらいがちょうどいいかと。

専門は経済学であり、その中でも政府の経済学である財政学が専門となる。税金を文化や芸術に使う理論的根拠、例えば補助金や公立の文化施設の運営は税金を使って行っているが、そういったもののあり方を研究しており、そうした関係もあって、国や地方自治体の施策立案のお手伝いをさせていただいている。その他に浜松では社団法人をつくって浜松市の文化施設のアートセンターの指定管理や東京のオーケストラの役員、私の住んでいる自治体のホールをつくる仕事をするなど、実際の現場に関わるマネジメントもしている。研究の専門としては政策。

色々な自治体のお手伝いをしているが、計画を作るというのは自治体にとって非常に重要なことである。2017年に文化芸術基本法が改正されたということもあり、計画の策定の動きも活発化しており、2020年には滋賀県、それから私の住んでいる港区、大阪府、大阪府で計画を作った。そして昨年度は東京都の計画を作った。東

京都ではビジョンと言っている。今年は愛知県と静岡県袋井市というところで計画作りをしている。それから秋田県のお手伝いをさせていただくということになった。

割と今までは東海道沿線が多かったが、今回は北の方で活動するという事で、土地勘はないが、色々な他の地域のことや国の動向のことなどもお伝えしながらと思っている。

私自身の秋田県との関わりは、私が会長を務めている文化経済学会がちょうど20年ぐらい前に田沢湖芸術村、わらび座のところで大会をやり、秋田県というのは民間でこんなすごい施設を持っているんだ、すごいところだと感じたのが最初の秋田県とのお付き合いとなる。その後、旅行で秋田市に来て、きりたんぼを食べたりということをしたぐらいであり、これまではあまり縁がなかった。けれども、秋田市でアートセンターをつくったり、新しい劇場が造られたり、美術館ができたりととても活発に文化のことをやっている県だということを遠目に見てきた。

今回、こういう形で議論させていただくことを楽しみにしている。とはいえ、秋田のことを全然知らないなので、是非、委員の皆様にご協力をいただきながら、副会長を務めていきたいと思う。

## 5 議事

### (1) 第3期あきた文化振興ビジョン骨子案について

(事務局)

【資料1、資料2にて説明】

(発言内容)

【骨子案について】

(片山副会長)

第1回の会合の中止に伴い、委員の皆さんからはビジョンの策定に関するご意見、ご質問を予め書面でいただいているが、今日が対面での初めての協議会となる。是非、骨子案についてのご意見やご質問のほか、自己紹介を交えて、皆さんが日頃考えていること、感じていること、忌憚のないご意見をお聞かせ願えればと思っている。

(伊藤委員)

(骨子案について) イメージできる部分とできない部分がある。委員として指名を受けたのは、高等学校文化連盟の会長であるからだと思うが、文化連盟では全国持ち回りで全校高等学校文化祭を行っており、秋田県では4年後の令和8年度に全国大会を開催することが決まっている。決まったのは数年前だが、県内の各学校では、開催に向けてどうやって活性化を図っていくのか、どういう組織をつくっていくのかということをやっている。

我々役員や事務局で話していることは、全国大会というのは目的ではあるが、単なる目的ではなく、通過点にしたいと考えている。どういう意味かということ、全国大会の運営に

向けて、高等学校の文化活動を活発化していきたいというのはあるが、それが終わってお疲れ様ということではなく、持続的、継続的に文化活動をやっていけるよう、細くても長い活動にしていかなければいけないと感じている。子どもは段々と歳をとっていく訳だが、その長い人生スパンの中で、それぞれの人たちが情報を共有し、一つの目標に向けて力を合わせていくというような組織作りが秋田県には必要ではないかと感じている。全国どこでも、世界中でも同じだと思うが、こういう人口の少ない県ではあるけれども、そこをつないでいく努力は必要なのではないかと感じている。

今回のビジョンの話をいただいたとき、こういったものをつくっていける一つの場になればいいと考えた。話を聞いていて、資料2の最後に書かれている推進体制について、色々と具体的なことをやっていくのは良いが、体制づくりはできるものなのか。せっかく「地域の实情に合った連携体制を構築する」と書いているのだから、是非これは進めてもらいたい。ただし、これを進めていく上でどういう体制をイメージしているのか、あるいは体制を構築するというのは誰がどういった形で進めていくのか。この辺りの具体策が見えてくれば良いと思う。どこか一つのところがやるのではなく、様々なところが関わってやっていくことになると思うが、その辺りのことを教えてもらえればと思って説明を聞いていた。

(齊藤委員)

これは感想だが、この第3期あきた文化振興ビジョンは大変素晴らしい案で、このビジョンのとおり実現されれば何も言うことはないと思う。第1期、第2期も恐らく同じような議論が重ねられてきたと思い、資料を拝見した。これがどの程度実現できたのかということで、課題も掲げられていたが、これは恐らく非の打ちどころのないビジョンだと思う。ただし、これは今のところ感想。

ここからは質問だが、資料2「骨子案の体系イメージ」について、施策1で「秋田県芸術文化振興基金」があるが、それはどのようなものなのか。そして、文化活動を支援するための資金がどれほどあるのか。私も色々な支援を受けてきたが、10万円や20万円では支援になっていないと感じている。100万円や200万円ということであれば、非常に効果的なものではないかと感じているので、どのような基金で、どれほどの支援があるのかその辺りを教えてもらいたい。

それから、施策2「文化財の保存、伝統文化などの継承と積極的な活用」の取組①「文化遺産を後世に残す取組と積極的な活用」は継続となっている。主な取組内容として、基礎資料の蓄積を目的とした状況把握、調査の実施となっているが、これはほとんど行われていないのではないか。今まで行われたもののすべてを把握しているわけではないが、これまではどうだったのか、その状況をお聞きしたい。

施策4「多様な人々の文化芸術活動への参加機会の確保と活動の活発化」の取組③「文化に関する学習機会の提供」のところだが、生涯学習センターの文化講座のメニューの充実とあるが、私もこの文化講座については、当初から関わってきたのだが、充実ということは今まで充実していなかったということになるのか。

施策7「公立文化施設の利用促進」の取組①「県有施設の魅力向上」の主な取組内容を見ると、県立博物館や近代美術館において、共同企画の実施や相互に連携するとなってい

るが、共同企画というのは、このビジョンにはそぐわないのではないか。博物館には設置目的がありますので、どうして一緒にやっていく必要があるのか。疑問に思っているので、具体的な取組があったら教えていただきたい。

施策11「文化情報の多様な発信と他分野との連携」の取組3「伝統行事や伝統芸能等文化資源の観光への活用」について、施策1には「民俗芸能」という言葉が出ているが、この3つの言葉（民俗芸能、伝統行事、伝統芸能）の定義を教えてください。定義をはっきりさせないと、文化の充実は進んでいかないと思っている。

（文化振興課 安田課長）

まず1つめの「秋田県芸術文化振興基金」の残高はだいたい8億円あるかないかというところであり、芸術文化活動に使う目的の基金となる。文化振興課だけではなく、文化財保護室でも使っているが、文化振興課でいえば、主に文化団体の活動に対して補助することに使われている。また、取組①「地域の民俗芸能や伝統文化等を後世に残す取組の推進」にも書いているように、民俗芸能保存団体が行う用具や衣装の修理にも補助をしている。

（文化財保護室 伊藤主任学芸主事）

文化振興課で所管している基金の一部を文化財保護室で執行している。金額ベースでは、年間でだいたい100万円ほど。多いときは年間200万円ほど執行していた。その目的は用具の修理が主で、民俗芸能保存団体が行う太鼓の修理や衣装の更新といったことに使っている。補助率は二分の一。

施策2の取組①の状況把握について、ほぼ全県を対象に調査を行ったのは平成26年となる。そのときは市町村を通して調査をした。これにより、約300の団体の活動を把握することができた。一部で個別に聞いたりすることはあるが、一斉に全部の団体を調査することは、これ以降はやっていない。県指定や国指定の団体を対象とした調査は令和3年度に行っている。

（文化振興課 安田課長）

令和3年度の調査については、県指定以上の民俗芸能保存団体に対し、今後の継承に必要な施策を知るためにアンケートを実施した。これについては、先日、資料として委員の方々に配布している。

（生涯学習課 奈良学芸主事）

生涯学習課では、県の職員が出向いて話をする「県庁出前講座」の取りまとめを行っている。講座には生涯学習課の職員だけが出向くわけではなく、業務を担当する部署の職員が講師となって活動している。生涯学習課では、例えば、図書館から博物館、美術館、農業科学館などを所管しているが、講座のメニューなどはそれぞれの施設で決めており、講座への応募件数や利用者の声を取り入れながら毎年検討を行い、メニューを更新している。

（文化振興課 安田課長）

施策7の取組①について、確かに博物館や美術館となると、それぞれ施設の成り立ちや

運営の目的は違っており、同じ内容のものを企画することはできないと思うが、ここで伝えたいことは、例えば、あきた芸術劇場ミルハスと秋田県総合文化会館アトリオンで言えば、ミルハスで公演したアーティストやオーケストラが、次の日にアトリオンで別な曲を演奏するなどといったことを考えている。美術館や博物館で言えば、同じテーマでもそれぞれの切り口で展示を行うといったことが考えられる。

（生涯学習課 奈良学芸主事）

県立美術館では秋田市の千秋美術館と一緒に「千住博展」や「草間彌生展」といった展覧会を二会場に分けてやっている。その開催に当たっては、仲小路商店街の皆さんにもたくさんのご協力をいただいている。

ご指摘のとおり、美術館、博物館といったミュージアムとミルハスやアトリオンといったホールでは機能が違うため、なかなか同じ展示をすべての会場でやるということは難しいが、例えば、舞踊をテーマとして、美術館では舞踊にまつわる作品を展示し、ミルハスやアトリオンでは舞踊の上演を行うといったコラボレーションがあってもいいのではないかと考えている。

（文化振興課 安田課長）

施策11の取組③の言葉の定義については、自身悩みながら使っているところがある。伝統行事については、すぐ思い浮かぶのはお祭りであり、お祭りが代表的な伝統行事だと思っている。県内各地に伝わる伝統行事は祭祀と密接に繋がっていると考えられ、そうしたものが長年に渡って特定の地域で特定の行事と結びついたものを伝統行事として整理している。

伝統行事と伝統芸能の違いは難しいが、例えば伝統的に伝わる踊りや唄といった、行事の中で使われるものも含め、伝統行事から切り離れたものを伝統芸能として整理している。また、民俗芸能は伝統芸能よりも広い範囲であり、民俗芸能の中に伝統芸能も含まれていると整理している。

（三富委員）

第1期から継承している基本目標「地域の文化力を高め、文化の力で秋田の元気を創造する」について、「地域の文化力」それから「秋田の元気」ということをどのように定義しているのか伺いたい。

また、施策7のところで、「美術館、博物館等における賑わいを創出する取組の推進」という文言があるが、美術館や博物館は設置条例があり、そこに設置目的が定められていると認識している。県立美術館の設置目的を調べたが、「県民の美術に関する教養の向上に資するため」と書かれていて、素人考えだが賑わいを創出し、関係人口・交流人口を増やすことと設置目的が結びつくのかという点でモヤモヤとしたところがある。実際、私も施設の運営をしているが、賑わいの創出を求められるとやはり集客を意識してしまい、エンターテインメントの要素を強めてやった方が良いということになってしまう。しかし、それが教養の向上に結びつくのかと日々疑問に思いながら取り組んでいる

ここからは感想だが、若者の担い手育成や伝統の継承といった取組がターゲットとする

ところについて、いくつか感じるところがある。1つは他の委員が事前のコメントで書いていたが、若者の担い手を育成していくプログラムとして、現行の取組が必要十分なのか。育成された結果の受け皿といったところに対するアプローチが着手されていないように見える。育成された若者にとっては、言ってしまうと無責任なことではないのか。また、別の観点から、文部科学省では最近、中学校や高校の部活動を地域に移行するという議論がなされている。例えば伝統芸能の継承に若者が関わる時、この部活動の移行と継承を結びつけて何か取組ができないかということを考えている。社内の同僚で秋田市の下浜に暮らしている者がおり、小学校に下浜の伝統芸能「羽川剣ばやし」を行うクラブがあるという。通っている児童は皆がそのクラブに所属し、毎年お祭りで発表するようである。しかし、今後の小学校の統廃合を考えると、その地域から学校が無くなってしまったとき、果たしてこの伝統芸能は誰が継承していくのかという問題がある。

それから、若い人をターゲットにした伝統芸能の体験プログラムの提供があるが、果たして若い人たちが伝統芸能の体験を踏まえ、将来担い手になることに対してどの程度の関心があるのか疑問に思う。むしろ全く興味がないという人が少なくなく、それがマジョリティなのではないか。そのときにただ体験プログラムを用意するだけでなく、若い人が取り組みたい、取り組まなくてはいけないと思うようなイメージづくりや情報発信といったところへのアプローチも必要なのではないかと思う。

若者をターゲットにするということについても、若い人というのは10代や20代というイメージだが、それより上の40代や50代を対象として、特に伝統芸能の担い手の育成という意味では、ターゲット層をシフトすることは考えられないのか。そのくらいの年齢になると、やはり地域の文化が大切だと気付き始めたり、お金を持っていたり、どこに移動するにも車を使って移動したりということで、担い手になり得るのではないかと思う。

最後に、成果と課題の定義について、もう少し改善の余地があるのではないか。今の書きぶりだとかこういう事業をやりました、その結果を意図的に解釈をして正解に繋がりますというように読みとれる。しかし、事業をやってその結果がどうなったのか、それが果たして成果といえるのか、課題といえるのかというのを見るため、必要なデータや状況の分析といったものがもう少しあるのではないかと思う。それらを得られるように事業を構築した方が、より説得力のあるものになっていくのではないかと思う。

(文化振興課 安田課長)

基本目標の「地域の文化力」と「秋田の元気」の定義について、「地域の文化力」をどういう指標で示すのかというのは難しいところであり、どういうところで数値化できるかは新たに考えていかなければならない。「地域の文化力」がどういうものかということ、秋田県民が音楽だったり、ダンスだったり、そういうものだけではなく、文化活動に皆が関わり、文化活動でもって楽しみを見出し、生きるための活力を得るといったところが「地域の文化力」ではないかと考えている。そういった文化活動により、日々の生活が楽しくなったり、人生に生きがいを見出し、そうしたものが県民の原動力となり、活力ある社会を作るとするのがこの基本目標の主旨と考えている。

美術館、博物館の賑わい創出については、設置目的と賑わい創出が結びつくのかという疑問は理解できるが、一方で文化観光推進法では、美術館や博物館といった文化施設を観

光資源として活用していく動きもあり、こうした国の動きも取り入れている。美術館や博物館には元々の設置目的があり、そこは地域の実情に合わせながら賑わい創出に取り組んでいく必要があると思っている。秋田県内に目を向けると、例えば、秋田県立美術館はエリアなかいち、秋田市の中心市街地の中にあり、ミルハスやアトリオンにも近く、秋田市ではここを芸術文化ゾーンとして活用を考えているところでもあるので、そうした環境にある文化施設として、秋田県立美術館が賑わい創出に貢献できる部分もあるのではないかと。

(三富委員)

今の説明によって「地域の文化力」の定義がよくわかった。こうやって定義を具体化することにより、それに貢献する実績が出ているという説明がしやすくなるのではないかと考えた。例えば、課長の説明にあったような県民がどれだけ文化活動に関わっているのかという数値が非常に大事だと思うし、参加した人がそれを楽しんだのか、それが何かに繋がったのかといった情報はアンケートで取りやすいと思うので、そういった数値を把握することで達成状況が判断しやすくなるのではないかと考えた。

(藤田委員)

「ラジオ・パーソナリティ」と肩書きに書いていただいたが、その他に歌手としても活動させていただいている。秋田で二児の子育てをしている母でもある。私自身は小学校から吹奏楽や演劇、放送部などに所属し、文化やこうした自己表現の場を通じて自分自身に自信を付けたり、悔しさを味わったり仲間を見つけたりしてきたと思っている。今、秋田で子育てをしている一人として、このような私が秋田でいただいた機会を次の世代にも繋げていきたい、という思いで本日こちらの会議に参加させていただいた。私からは3つの感想を述べさせていただきたいと思う。

1つは骨子案を説明していただいた感想であるが、「文化」というものが先にあり、それをどう繋げていくのかという意味で「文化」という言葉ばかりが先行してしまっている印象を受ける。文化を繋げるための人や参加する人、見る人、演じる人、そういった人がいなければこういう場をつくっていけないし、繋いでいけないと思う。もう少し人にフォーカスした伝え方ができないものかなと思った。芸術文化に関わる人たちのモチベーションが維持できるような、そういった人たちを応援できるようなビジョンであったなら嬉しい。

2つめは、どのプランでもそうだが、せっかく良いもの、良いステージ、良いサイト、良い動画を作っても、やはり見てもらえなければ、参加してもらえなければ意味がないと思うので、すべてにおいてどうPRするのか、どう発信するのかということまでしっかり落とし込んでおく必要があると感じている。

最後に3つめとして、文化芸術に興味のある方、実際に携わっている方々にとってはミルハスができたことはすごく嬉しいことだと思うが、残念ながら今現在、文化芸術にはそこまで興味がないという方々をどう巻き込んでいくのか、これも課題なのではないかと思う。

難しいとは思いますが、全く違う分野とコラボレーションしていくとか、スポーツ、商店街と何か一緒にやるということを探っていくといったことが必要なのではないかと。

どもたちというのは、親が興味があるもの、親が興味がある場に連れて行ってもらうというのが車社会の秋田ではメインになってしまう。骨子案には十分に盛り込んでいると思うが、親の興味関心に関わらず、学校などを通じて、色々な体験ができるということ、いかに文化に関わる人、興味を持つ人を増やすのかという視点も念頭に置いたらいいのではないかと思った。

(加賀谷委員)

私はダンサーとして、県外にも行くが、秋田を拠点に活動をしている。2年半前にイスラエルに行き、そこでフリーランスのダンサーとして仕事というか活動をしていた。そういった経験の中から感じたことを事前に提出した書面にも書いたが、私が実際に活動している視点からお話ししたいと思う。

まずこの案を見たとき、芸術文化というものがもう少し創造性があるものというか、自由な発想で生まれてくるものだとはイメージしていたのだが、県の方が目指す方向に当てはめていかなきゃいけないんじゃないかという気持ちになった。例えば、昨年、若者支援事業をやらないかということでフォンの5階にある「ふれあーるAKITA」に紹介してもらい行ったとき、秋田県芸術文化協会の協会員である必要があると言われた。私は協会員ではなかったので、他の若手アーティストの人と交流してほしいとか色々なアドバイスをしてくださることは嬉しかったが、こちらもやりたいことがあってそこに行ったのであり、支援してもらえないのなら自分でやろうと思った。必ずしも毎回そういう対応ではないが、活動している側の気持ちを汲み取っていただければ嬉しい。

それから若手アーティストの育成や発表というところで、若手アーティストを育成した場合、私も秋田で活動していて、どうやってこれからやっていこうかと悩んでいるところだが、それでもアーティストはたくさんいるという実感もある。そのような中でアーティストを育成していったら、それからどうしようとしているのか。今、若手アーティストがどれくらいいて、どういう状態にあるのかということを知りたい。

ここに来る前に、地域の芸術文化活動をアマチュアの芸術文化団体が支えている割合が多いという論文を読んできたが、秋田にもそういった劇団や演劇の人、ダンスの人がいると思うが、それだけで食べている人はなかなかいないと思う。そういうアマチュアの人たちをたくさん生み出して何がしたいのか。ジャンルも色々あるので、ちゃんとやっている芸術文化もあると思うが、それで食べていける人たちを生み出して活動できるようにするというところまでサポートしていかうと考えているのか聞かせてほしい。

(文化振興課 安田課長)

今度の新しいビジョンの中では、100%アーティストの方たちが納得のいくような形にはならないかもしれないが、そうした視点を盛り込んでいかなければいけないと思っている。今までの県の文化振興というのは、どちらかといえば文化団体を幅広く対象にしてきており、これからはもちろんそのつもりだが、一方で若手アーティスト、特に美術を中心に人材を育成し、そういった人たちの活動の場を作ってきたつもりではある。しかし、育成後の支援をどのようにつないでいくのかということを考えていかなければいけない時期に差し掛かっており、今のところはまだはっきりとした方向性は示すことができていない状

況である。今のお話を聞いて、何かビジョンの中に取り込める要素がないか検討してみたいと思う。

(加賀谷委員)

やはり日本ではダンサーだけではなく、プロのアーティストは少ないと思う。私がイスラエルで活動していたときも、例えばカンパニーとか色々な振付家の人が出て、そこからダンサーは給料をもらうが、背後には国や地方政府の助成、財団からの支援などがあり、どこのカンパニーも振付家の人もその(事業)収入だけで食べていける人は恐らくいなかったんじゃないかと思う。クラシックバレエやクラシック音楽でもなかなかそれだけでは食べていけない、支援が必要だということが書かれていたが、こういったことが少しずつできるようになっていけば、アーティストにとってありがたいと思う。

(池田委員)

県吹奏楽連盟から参加し、勤務する秋田高校では日々音楽の授業と吹奏楽部を担当している。

旧県民会館が解体され無くなってから、連盟では毎年行っている大会などを秋田市文化会館ですとか市内の施設を借りて計画的に行ってきたが、ようやくミルハスが完成し、大きな会場で演奏する機会ができたことにとっても喜んでいる。連盟だけではなく、他の音楽団体もそうなのではないかと思っている。

県民会館があったときは、連盟が主催して「合唱と吹奏楽のための大いなる秋田」という40分くらいの作品を毎年定期公演として秋に行っていたが、ミルハスが完成したことによりまたできるようになる。この公演は大人数の合唱を伴うものであり、県民歌が三楽章に入っているが、コロナについての懸念もあることから、いきなりできるかどうかはわからない。6月5日のミルハスの開館記念式典でも秋田吹奏楽団と合唱の方々の素晴らしい演奏を支援させていただいたが、定期公演をまた復活できればと思っている。

最近の定期公演は連盟が主催して行っていたが、20年くらい遡ると秋田県が主催で連盟がどういう関わりだったか詳細は忘れてしまったが、旧県民会館で「秋田県音楽祭」というものを行っており、そこには合唱や伝統芸能の方々も出演し、最後は40分くらいかけて「大いなる秋田」を合唱と吹奏楽で行って終わるといった大きな音楽祭が開催されていた。音楽でも様々なジャンルの方々の出演があり、ステージ進行や準備、リハーサルの見学など非常に勉強になった。ジャンルを問わず、そのような音楽団体を結びつけるようなイベントをミルハスを拠点としてできないものかなと思う。

また、これは音楽に限ったことではあるが、話を広げて他県を見ると、県の主催による芸術祭というものが行われている県が何県もあり、山形や新潟、静岡でも行われている。その各県の芸術祭は、シリーズのように例えば9月から11月までは演奏会や展覧会など様々な芸術のジャンルによる公演あるいは展覧会が続いていく。秋田県でもそのようなイベントなどを構想されているのかお伺いしたい。

(文化振興課 安田課長)

他県では特定の期間で美術展や合唱祭を開催しており、例えば秋田市でも「秋田市芸術

祭」をやっている。今のところ、県ではそういった芸術祭の開催は予定していないが、「あきた県民文化芸術祭」という名称で、毎年9月から11月にかけて、集中的に県内の文化団体が主体となって様々な公演などを行っている。具体的には、県で「あきた県民文化芸術祭」という冠を作り、それに応募してもらい、県民全体で集中的に文化活動を行ってもらうという取組を実施している。

(相原委員)

私の仕事は皆さんとは違い、文化芸術とはとても距離のある仕事であり、文化芸術の現場を知らないが、今回委員を拝命し、第2期のビジョンの成果と課題を拝見したところ、やはり相対的にはなかなか苦戦を強いられているというのが率直な感想である。やはり時間を掛けた取組が必要なものが多いという印象を持った。そういった経緯を見ると、今回の第3期ビジョンは、中身としてはこれでいいのではないかと思う。ただし、委員の方々の様々な意見を伺ったり、ペーパーで以前出されたものを読むと、実際の運用においては、施策の目的を十分に果たしていないものも多いという印象を持っている。ビジョンの内容が決まったら、実際の施策の運用を文化芸術の振興に繋がる形で行ってもらえればと思っている。

(齊藤委員)

賑わいの創出という話がありましたが、このビジョンの策定の目的が集客という風にしが見えない。数を集めれば良いという問題ではなく、文化の質の問題。この点がビジョンの中にどれだけ反映されているのかがほとんど見えない。だからそれが「文化力を高め」とか、「文化の力で秋田の元気を創造する」といった言葉に出てきていると思う。実際は人数を集めるよりも質が重要。文化の質をどのように高めていくのかが秋田県に課せられた1つの課題ではないかと思う。そういうところがこの骨子案ではよくわからない。

それから、この骨子案は9月の議会にかけられるということだが、私はもっと十分に練らなければいけないのではないかと思う。議会にかけるときはこういった委員から十分に意見を聞いたのでこのように進めると提案をするはず。だから今日の会議も恐らくアライブづくりということで行われた可能性が高い。もっとそこら辺の疑問を解いていただきたい、あるいは説得していただきたい。基本方針はあるものの、言葉が非常に先行していて、実際の一つひとつの具体的な方策というのはほとんど見えてこない。これはビジョンなので、その背景には必ずこうしたい、ああしたいということがあると思う。それをもう少し詳しく説明していただければ、かなり具体的なものとして意見が深まるのではないかなと思う。

骨子案では、一番最初の基本方針1の施策1に「民俗芸能の継承支援」を掲げている。私は民俗芸能を三十数年も研究してきたが、今一番しなければいけないのは状況把握である。県指定を含めて、民俗芸能が一体どうなっているのか。このことをとにかく早急に実態調査する。アンケートではほとんどわからない。アンケートとは一方的に聞き出すもの。本質は何も見えてこない。何がここでネックになっているのか、これを積極的に調査をしなければ、対策や施策は出てこないと思う。

先ほど秋田市下浜の話で出たものは「羽川剣ばやし」のことだろうと思う。県内では各

小学校の統合がかなり進んでいる。秋田市太平もそうであり、そこでは「太平山谷番楽」という地域の民俗芸能を学校の中で子どもたちに継承しようとして、郷土学習などといった形で進めてはいる。統合して地域が広くなると、秋田弁で言えば「俺（おら）ほがなしに関係あるの」となる。下浜の羽川地区以外の人、あるいは太平の山谷地区以外の人はそのようになる。PTAの役員からも「なんで統合したことで、今までやってきたことと全然違うことを文化と称して押しつけるの」という話が出る。こういう状況であれば、どうやって継承できるのか。こうした問題がある中で、実態調査をきちんとしない限り、様々な問題が出てくる。

ビジョンを改定するに当たり、単にお題目だけでいいというのであれば100%この内容でいいのではないか。ただそれでは、問題が全然見えていないということではないか。実態調査をきちんとするということが今回の最大の施策の一つなのではないかと思う。芸術文化振興基金を活用した用具修理は行っているが、用具修理は1件に対して20～30万円の補助である。その後どうなったかを調査しているのか。20～30万円使ったという報告書は出るが、それが後世に残る取組としてちゃんと活かされているのか。活かされないとしても、何らかの形で変化があったということまでフォローしているのか。こうした観点から、今言ったようなことを重点的に進めていってほしい

（片山副会長）

基本目標のところ委員から指摘があったが、文化力を高めて、という政治力でも経済力でもなく、文化力を高めて元気を創造するということの、どういう状態が元気な状態なのか、ここをきちんと考えていく必要がある。仮の基本目標（タイトル）ではあるが、この基本目標をどうするのかということ、それ自体を見直すということがあっていいと思う。現状がどうであって、そこをどう変えたいのか、というところをきちんと把握していくということから次期ビジョンを組み立てていくということが一番重要だと思う。今日は実質的な初回なので、これから議論していくということだと思う。実態を踏まえて、今後の3年間を見通せるビジョンをつくっていければと思う。

（2）その他

（事務局）

【10月に開催予定の3回目（最終回）の協議会について説明】

（齊藤委員）

今日初めて顔を合わせて話をして、これだけの意見が出ているのだから、次の3回目に素案を出してこれで終わりということでもいいのか。

（片山副会長）

いや、これは議論がスタートしたばかりなので、これから今の意見を踏まえて修正してやりとりをして、10月に素案をつくって議論をするということだと思う。議会でも議論してもらえればいいと思う。議論はこれからというところで、まだ始まったばかりという

認識で私はいる。

(齊藤委員)

私は3回で収まらないのではないかと。少なくとも5回ぐらいは開いて早急に進めていけない問題ではないかと思う。

(片山副会長)

色々な議論を出してもらい、必要であれば回を増やして議論していくということも必要だと思う。まずは今日が初回なので、意見を出していただいたというところで、これを踏まえて今後のスケジュールを組んでいくということだと思う。

決して議論をせず、アリバイづくりで済ませてしまおうという訳ではないと思う。実際に集まることが難しければオンラインでやるということもあると思うので、せっかく協議会というものをつくり、策定するところまでで終わりということではなく、継続して議論していく場としてつくった訳であり、そこはしっかり議論していくということかと思う。

(事務局)

【4回目の協議会の開催について調整】